



身近な宝



川崎ゆき

身近なところに宝物があるらしいが、近い場所だろうか。近くというのは近所だ。この近所は結構範囲を広げることができる。例えば近くの町。近くの市町村。もっといえば近くの国まで拡がる。これはもう外国なので、身近なところと言うには遠すぎるが、世界地図を見ていると、近いことは確かだ。

身近というのは距離だけではなく、身近な人もいるし、身近な事柄もある。宝物が果たしてあるのかどうかは分からないが。

幸せの青い鳥というのがある。これはよく逃げたりする。そんなに遠くへ探しに行かなくても、ずっと横にいた鳥がそれだったりする。

そうなるとう精神的なものになる。大事なものと常に接しているのに、その価値が分からなかったとかだ。当然その状況では、価値はそれほどないので、価値観が変わったのか、または価値を見出したのかだ。

宝物というのは金銀財宝のように、宝箱の中に入っているようなもので、価値があるのは効果があるからだ。一生かかっても稼げないような金銀が、一気に手に入る。

その金額は一生かければ得られるかかもしれないが、その間使っている。一生分の金額を常に持ち、常に使える状態ではない。宝箱は探し出せば得られる。当然手間暇はかかるが、得ればそのあと楽だろう。

ただ、宝物を得てからが問題で、使えば減るし、下手に財産を持っていると、災いの元になったりする。

だから、身近にある宝物とは、もっと精神的なものだろう。そして、これは減らなかつたりする。

「また、宝物探しに行くのかい」

親友の冒険家が宝探しに行くらしい。

「身近なところにあると聞いているが」

「ない」

「そうなの」

「やはり秘境のさらに奥、滝などが落ちている裏側の洞窟とか」

「しかし、旅費も大変だろ」

「いや、物売りをしながら行くんだ。それに、そのための蓄えもある」

「その蓄えで、寝て暮らした方が楽なんじゃない」

「数年は遊んで暮らせるけどね」

「これで何度目だい」

「五回目の冒険だ」

「今回もだめじゃないの」

「今回は宝の地図がある」

「偽物だろ」

「大金を叩いて手に入れた」

「身近なところに宝物はあると言うから、きっと行ってもないよ」

「身近」

「慣れ親しんでいる場所とかだよ」

「探したけどなかった」

「じゃ、慣れ親しんでいる事柄とかはどう。いつもやっていることが、実は宝物だったりするよ」

「じゃ、宝探しがそうだ。これは慣れ親しんでいるし、いつもやっている」

「え」

「だから、宝探しそのものが宝なんだ」

「そこまで分かっている、ありもしない宝探しに出るのかい」

「ネタがないとね、動けないだろ」

「じゃ、宝とはネタのことかい」

「宝って、やはり値打ちのあるもの。欲しいと思えるものだろ。これは欲だ。従って宝とは欲なんだ」

「よく分からないけど、頑張っってね」

「ああ、今回は汗水垂らして働いたので、旅費も豊富なんだ。かなり楽に行ける。宿屋にも泊まれる。良いものも食える。宝のある秘境は雉ヶが谷って言ってね、雉が多いんだ。雉料理が名物なんだ。これも楽しみだ」

「要するに旅行なんだ」

「まあな」

「君は宝探しを身近なものにしてしまったようだね。やはり宝物は身近にあったんだ」

「違うと思うよ」

「いや、そうだ」

了